

フォークナーと批評傾向

福田 実

一九五〇年にノーベル賞を受けたウィリアム・フォークナー William Faulkner は、ヘミングウェイとともに二十世紀アメリカ文学を花々しく代表する作家である。この二人は共に「失われた世代」の幻滅の中からその文学の場を見出し、両者はたがいに相手を意識し反撥して、全く対蹠的な文学を築き上げている。ヘミングウェイの抑制された簡潔で直截な文体、純粹な客観性、白昼の明るさ、行動力、反伝統主義および非地方主義にたいして、フォークナーの難渋冗長な文体と複雑を極める構成、決定的な観念性と主観性、黒いヴァイオレンスの恐怖の暗黒さ、伝統主義および地方主義と鋭い対立をみせている。それはまた、ヘミングウェイが一般読者に広く愛読されたという事実と、ノーベル賞受賞直前においてもフォークナーの全作品が絶版になっていたという事実の対照でもある。「失われた世代」の英雄はヘミングウェイであり、ヘミングウェイ文学の業績は一九五〇年当時にあつてひろく一般に認められているところであつた。これに反してフォークナーは決して小さい存在ではなかったが、その文学の評価は安定したものではなかった。その評価の振幅は大きな差を示していた。しかしフォークナーはヘミングウェイよりも早く受賞した。その詮衡事情は知らないが、一般的にこの結果は意外なもので

あったといえよう。たとえば、かなり公平だという定評のあったブランケンシップ Russell Blankenship の「アメリカ文学史」American Literature as an Expression of the National Mind は、初版は一九三一年であるが、四九年の改訂版では「失われた世代」の作家の項目に補強を加え、「誰がために鐘は鳴る」(一九四〇)をふくめて、ヘミングウェイはマーク・トウェイン以後のアメリカに現われた最も独創的な作家として十頁余りのスペースをあたえられ、それについてフィッツジェラルド、スタインベック、トマス・ウルフ、マーカント、ファレル、ドス・パソスからウォレンに至るまでの現代アメリカ作家が取り上げられているにもかかわらず、その翌年にはノーベル賞をうけたフォークナーについては、その名前すら言及されず、完全に抹殺されている。スチュアート教授によれば、フォークナーが授賞されると「かなり多くの批評家が図書館に行つて、彼らがかつて悪口をいった本を大変な速度と注意深さで読みはじめた」のだった。

実際、フォークナーの評価は長いあいだ戸迷つたものであった。完全な黙殺から手酷しい非難までをふくめて、殊にアメリカでの批評はかなり痛烈なものであった。それはかつてメルヴィルの「白鯨」をはじめとする作品が全く理解されず「狂人文学」(Bedlam Literature)と罵られたあの悲劇にも通じるものであったろうか。メルヴィルはそのような四面楚歌の無理解にさらされた自分を作品「ピエール」の中で、「元氣を出せ、元氣を出せ、おお、バルキントンよ！暗澹の中にも耐え忍べ、半神よ！お前が大洋にはろびるそのしぶきから——真直ぐにお前の神格は立ち昇るのだ！」と自らを励ました。しかし、フォークナーはただ、「批評家と文学界全体を無関心と軽べつをもってながめはじめつた」(R. Coughlan)のじある。

フォークナーは青年期の比較的短期間を除いて南部のミシシッピ州に生涯を定住し、彼の愛する南部の物語〔寓話〕を別として〕を書き通したのだが、南部の人々自身が彼を理解していなかった。フォークナーがノーベ

ル賞を受けたという電報が入ったとき、南部の「ジャクソン・デーリー・ニュース」紙の編集長は、「彼は頽廢の宣伝者であり、正確には、うさん臭い (pry) 文学の派に属している」と書いた。ハベル Jay B. Hubbell によると、元々、南部の保守的な読者は自然主義的な小説よりもロマンティックな小説を好み、自分たちの土地と人間をハリス Joel Chandler Harris (一八四八—一九〇八。黒人、農園主、貧困白人を題材としてユーモラスな写実主義作品を書いた) やページ Thomas Nelson Page (一八五三—一九二二。南部生活を美しく描写した) の眼でみる習慣があったので、フォークナーの「サンクチュアリ」Sanctuary は、彼がひねくれた根性からか、あるいは北部に作品を売りつけるために、自分のお国を中傷したのだと誤解した。南部の人々は、シカゴやデトロイトと同じに犯罪や暴力が南部の生活の一部であることを認めたくなかった。それにニグロ問題についてもフォークナーは正統ではない見解を述べているとみられた。おそらく、前近代的要素が非常に濃厚で、ファンダメンタルズの保守的な信仰を根強く持つ南部の旧世代にとっては、クエンティンの近親相姦の觀念、キャンデイスの性的無秩序、ボバイの暴力、テンブルの墮落、白黒混血したジョウ・クリスマスの犯罪、無力なハイタワー、ファシスト的殘忍さのグリム、メンフィスの墮落した町などを描くフォークナーはむしろ白眼視されたにちがいない。オクスフォードの町の人々は、町の名がフォークナーの名前と関連して人の口にのぼるのを憤慨した。フォークナーが授賞されたとき、オクスフォードの町では町のスローガン "Oxford, home of Ole Miss." に "and William Faulkner" を加えようという提案があったが、町と個人は別だという反対意見が出て流れてしまった。やはりフォークナーにたいして抱いた南部の人々の先入観は根強かったというべきだろうか。

フォークナーはアメリカでかならずしも例外ではないが極端な批評の両極に立たされた作家である。現在ではフォークナーにたいするアメリカの批評は一言にしていえば「偉大な作家」という評価に尽きている。彼の現代

文学にたいする貢献の程度、その作家精神の偉大さ、作品の偉大さの実態については、じつに多くの実証と評価が一九五〇年以後アメリカで行われている（スチュアート教授によると、一九五四―五七年の四年間にアメリカで行われた研究論文は、ヘミングウェイの七十八にたいしてフォークナーは百六十で現代作家の首位をしめている）が、その多くは現代アメリカの生んだ偉大な作家に讃歌を捧げ、フォークナーの偉大さを前提として帰納的方法を行っているように思われる。一九五六年にオファオレイン Sean O'Faolain が行ったフォークナー批判は、カウリー以後のアメリカにおけるフォークナー批評を背景として外部から行われたものであろうし、おそらく今後フォークナーの根本的な問題についての論議がアメリカの内外から起ってくるにちがいない。

私はここでは、フォークナー批評の現在にいたる概要を書き留めておく。（受賞に至るまでのフォークナー批評の経緯は一九五一年に出版されたホフマン教授編集の William Faulkner: Two Decades of Criticism のホフマン教授の序文に詳細に述べられているので、本稿はそれに負うところが多い。）

一九二六年、シャーウッド・アンドソンの幹旋によってフォークナーの処女作「兵士の報酬」 Soldier's Pay が出版され、これは「失われた世代」に属する審美的傾向の作品として一部の注目を惹いたが、フォークナーが批評家の強い注目を浴びはじめたのは、「響きと怒り」 Sound and Fury (1929) および Sanctuary (1931) からであった。前者は南部の旧家コンプソン家の敗退の物語であり、たえず過去に遡上る複雑な構成とジョイス的意識の流れを用いた独特な文体とによって四人の兄弟の救いのない醜にくさと苦悩が語られる。兄クエンティンが妹キャディの不身持に悩み、近親相姦の妄想に駆られて自殺するという筋書が中心になっている。後者は、性的不能者のポパイが女子学生を奇妙な方法で犯す事件にからむ殺人事件とそれに関係のある人物の反応を描いている。差し障りなくその外面的特長をいえば、この二作は不毛の苦悩、存在の無意味（前者の題名の出典は「マ

クベス」の有名な人生無意味の独白）近親相姦の観念、暴力と悪徳、性的倒錯、南部の墮落腐敗を題材として扱っている。「八月の光」*Light in August* (1932) も、黒人の血が混っていると妄執するジョウ・クリスマスの情婦殺人事件を題材としている。これらの戦慄的な要素を持つフォークナーの文学にたいして、一九三〇年代のアメリカの批評界はどのような視点をあたえていたであろうか。

一般的に彼の作品の暴力、残虐、性的倒錯は非難的となった。その一つの批評はマクコール Camille J. McCole だ、フォークナーの作品には道徳的なものが全くなく、プロットの順序は救いがたく混乱し、文体はひどくばかばかしいものであり、白痴や変質にたいするフォークナーの堪えられない興味によって恐怖が混成されている。フォークナーは悪徳のセールスマンであり、残虐と異常性を売物にする金儲け主義の売文業者である、というもので、これは一九三六年に「カトリック世界」誌に書かれている。この批評などは文学以前のもので問題にならないが、なお当時のアメリカのフォークナーにたいする一般的見解を代表しているといえよう。新人本主義のトムソン Alan R. Thompson は、残虐は人性に生得のものであるが、フォークナーたちによって示される残虐の礼賛は「悲観的懷疑論」に基いているもので、この見地からすると道徳と向上心は風習と夢であるにすぎず、世界は非人間的なメカニズムである。これらの作家の作品はアメリカの自然主義作家が導いてきた盲目的、無目的自然主義の産物であるに他ならない。恐怖というものは、エディプス王やリア王の悲劇に示されるように、一つの大きな美的効果を達成する正当な手段であるが、フォークナーは純粹な美的効果をもたらすように素材を変形することに失敗している、と述べている。さらに「人本主義批判」一派のチェンバレン John Chamberlain も、ドストイェフスキーは恐怖と高揚の両者を喚起するが、フォークナーが喚起するのは恐怖と加虐的な残忍だけで高揚がなく、心の温かみが欠けているといい、キャンビー Henry S. Canby はフォークナーにみられる腐

敗した病的な主題の惑溺は、無限の多様性を持つアメリカの場面を歪曲するとともに、人間の真実を犠牲にして人性の潜在力を誇張するものと非難している。また、ハートウィック Harry Hartwick によると、自然主義の心底には人生に同情と温情が持たれているものだが、フォークナーの意地の悪い作品には自然主義の重要な伝統が失われていて、病的な快楽のために残虐行為が利用されている。醜惡なもの、残忍なものにたいする唯一の弁明である「道徳的関心」がフォークナーにはないので、その作品は「精神的共鳴」といふべきものを欠いている。このハートウィックの批評は、現在では全く正反対に立つ評価によって覆えられてしまった。

左翼陣営の批評家として一九三〇年代に活躍し、「偉大な伝統」を著したグランヴィル・ヒックスは、アメリカ文学の伝統はアメリカの現実生活の伸展に生命的な希望を見出しているという視点から、病的、肉慾的で残忍と死の跳梁を反映するフォークナーの世界には、果して何らかの新しい個性的な人生観が存在しているかという反問をにかけている。ストーン Geoffrey Stone は、フォークナーの作品の強烈な恐怖の描写は意味の暗示が漠然としているし、恐怖に心を奪われることによって現実を逃避していると述べている。「危機の作家」のガイズマー Maxwell Geismer は「響きと怒り」をかなり綿密に分析して白痴ベンジーのあたえる感動を認め、「われわれの幼年期の経験をこの作品以上に呼び起す現代作品は他にない」と評したが、しかし南部の過去にとりつかれたフォークナーは、「黒人と現代的な女性」にたいして憎悪を持って、この二者を南部の挫折の悪の原因として贖罪の山羊に用い（ファシストがユダヤ人にたいしたように）していると批判の論点を展開し、「フォークナーの作品の大部分は、（ファシズムの源泉である）先祖返^{リターン・ジョー}へ^リ的、異教精神復興^{ネオ・パグン}的、神經症的不満の大きな伝統に立つ」ものであり、「八月の光」(Light in August) のジョウ・クリスマスにみられる「生への憎しみ」を根本觀念として持つフォークナーの全作品には「大いなる憎悪」という言葉が該当する、と結論している。ガイズマーが

当時の全体主義的精神状況のパターンをフォークナーに見出しているのはいささか誇張の見解であろうが、さらにその基底には、「八月の光」のジョアナ・バーデンの殺害やクリスマスの私刑にみられるフォークナーの根本的な態度には、アメリカ現代の成長を軽視し、拒否するものだという視点が横たわっている。

フォークナーの異常に複雑な仕組みや文体は、またこれら三〇年代の批評家の非難的となっていた。ヒックスはフォークナーの作品はあらかじめ普通の形式で物語を作っておいてから、それを故意に歪めた形式に作り直したと疑われる節もあるといい、トムソンは、フォークナーの文体、方法はよく見てリーヴィスのいう道徳的不安と、悪くいえば非理性的、人間以下の行動形式の邪悪な熱中とに結びついているとした。このような批判は根本的にフォークナーの文学の発想に関連するものであるが、この分野は現在まだ十分に解釈されているとはいえない。

一九三〇年代のアメリカにおける左翼批評の勢力から、当然左翼側のフォークナー批評を見逃すことはできない。道徳的見地からみるフォークナー批判にたいして、左翼は社会的批評の立場に立ち、むしろフォークナーにたいして好感を抱いていたように思われる。左翼には、頹廢した南部社会の描写にフォークナーの社会意識の徴候を看取する面と、全く社会的良心がみられないとする面があった。たとえば、これらの批評家はアースキン・コールドウェルの「タバコ・ロード」に見られる社会的良心がフォークナーの作品にはみられないから、フォークナーはコールドウェルよりはるかに劣り、その作品は安っぽい無目的なメロドラマティックなものになっていると評している。しかし、左翼批評の代表者ともいべきカルヴァートン V. F. Calverton は、フォークナーには重要な現代問題の関心が欠けているとの左翼陣営の批評態度にたいして、南部は「半封建的」であり、過去の経験の分野に依存して行詰り退歩している地域であるから、「階級闘争」を持出すことは無理だと弁護してい

る。バーバラ・ジルス Barbara Giles は、フォークナーが、過去の自己本位の神話にしがみつゝ、彼らの祖先の華麗な伝説で自己を美化している「斜陽階級」の一人だと定義している。コーフラン R. Coughlan によると、フォークナーは作家という立場よりもむしろ「農民」という立場を意識して口にしていたと伝えられるが、この意識が具体的に何を意味していたかは興味のある問題だ。しかしフォークナーにはマルキシスト的社会意識は全くなかったと断言できる。エレンブルクを筆頭とするソヴィエト作家がアメリカを訪れたとき、何よりもフォークナーとの会見を希望したが、國務省の熱心な斡旋にもかかわらずフォークナーは一度は拒絶し、二度目は会見を十分間と指定したために、ソヴィエト作家は感情を害して会見を断念したという。フォークナーは、「あの連中は思想について語りたいのだろうが、私は思想には興味がない。私は文学者^{リテラチュマン}ではなく、作家^{ウァイター}だ」と述べたそうだが、この逸話は左翼陣營の関心とフォークナーの無関心な立場とを明白に物語っている。

ヨーロッパのフォークナー批評は概して好意的なものが多く、批判としてはサルトルのフォークナー論（一九三九）が興味深い。特に、いわゆるフォークナー評価の転換期におこなわれたサルトルの批判は、おそらく相手がサルトルであるだけにアメリカ批評界に強い印象をあたえたものにちがいない。サルトルはフォークナーの「響きと怒り」における「時間」の問題について論評を加えた論文で、作家の形而上学は小説の手法より先決問題だとして、フォークナーの形而上学を時間の形而上学とする観点に立っている。フォークナーの現在、は本質的に破局的で、過去と未来との間の観念的境界ではない。現在は現われるとたちまち消えて行く。現在には前進がなく、未来からは何も現われてこない。フォークナーが事件を示すときにはいつも事件が完了してしまったときであり（未来もすでに過去である。クリスマスは殺人を行う前に、I had to do it と過去時制で呼んでいる）、人間は未来のない総和、現在もっている不幸の総和である。現在は在るのではなく、すべては在った過去であ

る。過去はフオークナーの妄念であり、決して失われない。フオークナーは過去によって首の廻らなくなった人間で、形をなさない未来は思い出の過重によってのみ決定される。意識は時間化されねばならず、人間を「現在もっているものの総和」と定義することは許されない。人間は彼がもちうるであろうものの総和であり、企投がないかぎり意味がない。ところがフオークナーの人間は可能性を奪われ、過去によってのみ説明される。クエンティンの自殺はすでに決定された出来事で不可避のものであり、自殺をすることもしないことも彼の人間的選択の範囲内に入らない。フオークナーが人生に見出す無意味は、先ずフオークナーが人生を無意味と決めてかかったのではないか。どうも自分の形而上学以前に絶望しているらしい。「私は彼の技巧は好むが、彼の形而上学は信じない。」閉じられていても未来は未来なのだ。

サルトルの論評は概要このようなもので、サルトル特有の企投、projectの哲学への附会が明らかだが、たしかにフオークナーの不毛の世界は暗黒に包まれたものである。クエンティンの父があたえる時計は「すべての希望と欲望の墓場」であり、妹キャンディスは「宿命を背負い、それを知っていた、宿命を求めることもなく逃れる」ともなく受け容れた」(Doomed and know it, accepted the doom without either seeking or fleeing it. じの doomed, doom という語はフオークナーのキー・ワードである)し、殺人を犯す直前のジョウ・クリスマスには「かつてあった一切は、これからあるであろう一切とおなじものだし、これからくる明日とこれまでにあった明日とはおなじもの」(since all that had ever been was the same as all that was to be, (since) tomorrow to-be and had-been would be the same)なのである。サルトルの時間性に関するかぎり、フオークナーは未来への企投のない決定論的宿命に絶望する自然主義者であり、ハートウィックのいう出口のない「盲ら小路」に迷いこんでいるわけであって、「人間不滅」の理想のかげらさえ全く見当る余地がないといわねばならない。

フォークナーにたいする否定的、疑問的、あるいは傍観的批評にたいして、フォークナー文学に好意的態度をとって説明しようとする立場は、左翼の潜在的な希望の立場を除いては一九三〇年代のアメリカではまだ強い力をもっていない。フォークナーが最も生産的であった時期は一九二九—一九三九年の十年間で、「サートリス」「響きと怒り」「死の床に横たわりて」「サンクチュアリ」「八月の光」「バイロン」「アブサロム、アブサロム!」「野生の棕櫚」と問題の長篇小説の大部分のほか、重要な短篇集を発表している。この時期にフォークナー文学の評価はアメリカよりもむしろ、フランス、イギリスにおいて高かった観が深い。フランスは第一次大戦以後アメリカにたいしてむしろ異常なほどの関心を払っていた国である。一九三〇年代には両国の文化交流が盛んに行われ、ベルナル・ファイヤアンドレ・シークフリードのアメリカ文明論はその関心の深さを示している。アメリカ文学の新大陸の新鮮味と新たなディメンションはすでに高度の文学水準をもったフランス人にとって未知の生命力を痛感させるものであった。殊に「失われた世代」の大戦後の幻滅感と大不況を背景とするいわゆる黒い文学はフランス人の嗜好に合った。コールドウェルの「タバコ・ロード」は絶対的人気を呼び、サルトルは「U・S・A」のドス・パソスを現代の最も偉大な作家と評する一方、フォークナーを分析した。マルローは「サンクチュアリ」をギリシャ劇と比較した。アンドレ・ジイドは、フォークナーはアメリカ新星座の最も重要な星だと賞讃した（しかし、ジイドはフォークナーは魂を失っていると評した）。フランスではフォークナーは非常に問題にされたが、知性と人間精神の自由な活動を愛するフランス人にとって、フォークナーがどのように解されたかはサルトルの評価によっても理解されるであろう。フォークナーのイギリスにおける評価はアメリカ国内の攻撃的批評傾向とは対照的にかなり好感的なもので、ニュー・ステーツマン誌は一九三〇年に、フォークナーはローレンスやヘミングウェイよりも優っていると評した。ストロング L. A. G. Strong は「フォークナーは天才と

という言葉に該当する少数の一人であるといひ（一九三二）、「響きと怒り」の複雑な手法はその必要とする効果上欠くべからざるものと考へた。ヘンリー・スミス Henry Smith は二九年に、フォークナーは地方生活の研究を或る重要な普遍的意味に結合することができたと述べているが、これはフォークナー文学が単に南部の地方主義的文学ではないという四〇年代以後の認識の先鞭をつけたものといえよう。しかし、かなりの批判もあった。

当時英文壇の一方の雄であつたウィンダム・ルイス Wyndham Lewis は、「芸術のない人間」（一九三四）の中の「とうもろこしの穂軸を持つたモラリスト」「サンクチュアリ」でポバイがテンブルを犯すときに用いた）の章で、フォークナーは時としてギリシャ劇にあるような、人間生活を支配する厳しい運命の概念を好み、それが彼の作品のメロドラマ的な支柱になっている。しかし、彼の文体は“sourceless”とか“hybrid”といった言葉を反覆的に用いて、氣の抜けた散文を景氣づけるために詩趣をはさんだ、いわば散文を装った二流の駄詩といったもので、杜撰で冗長な芸術的仕掛けだ、という。リーヴィス F. R. Leavis は「八月の光」についてフォークナーは依然としてモダンであらうとする自意識がつよいが、この意識はおそらく基本的な意図の不確かさを反映するのだらうと述べた。フォークナーの文学の基本的な意図にたいする考察は今日においても最も不明瞭に残っている重要な課題だと私は考へる。

アメリカ国内では激しいフォークナー論難の中からしだいに理解的評価に向う傾向があつた。しかし、フォークナーの文学世界にアメリカ文学の立場から解明の光を投げたのは、オドネル George M. O'Donnell およびカウリー Malcolm Cowley であつた。一九三九年に南部ミシシッピ州の出身でアレン・ティットに教育をうけたオドネルは、フォークナーの文学世界を統一する一つの概念を提起した「フォークナーの神話」 Faulkner's Mythology によつて、アメリカのフォークナー批評に新生面を開拓し、フォークナー研究の前進の根底を築い

た。オドネルが南部の批評家としてフォークナーの南部文学の特質を明らかにしたことは、今日に至るまでフォークナー研究にたいして多くの貢献を行っている南部出身批評家群の第一矢を放ったものであった。

オドネルはフォークナーが伝統的なモラリストとして非伝統的な南部をながめ、その小説は伝統主義と非伝統主義的な近代社会の間の争いをめぐって築かれる一連の相互に関連した神話（あるいは一個の神話）であるとした。この神話には二種類の人物系がある。一は伝統的に、つまり倫理的に責任感のある意志をもって行動し、倫理性とヒューマニズムを代表する南部の旧家系サートリス家の一群であり、一は南北戦争以後勝者である北部の勢力に便乗してきた貧乏白人のスノープス家の一群である。サートリス系から観れば、スノープス系は非伝統的で、非倫理的で、利己的で、倫理的な義務観がない。このサートリス系スノープスの争いがフォークナーの作品の主題であり、それは根本的にはヒューマニズム対自然主義のたたかいである。フォークナーはスノープス世界の中のサートリス的モラルをもつ作家、そしてもう一つの点はフォークナーがアレゴリーの作家である。「サンクチュアリ」はその代表的なもので、たとえば、女子学生のテンプルは「墮落しているが純潔な南部女性」を、性的不能者のポパイは「無道徳な現代主義」を、ポパイの犯罪を阻止しようとして無実の罪を負うグッドウィンは「無知な貧乏白人」を表わしている、というのである。

オドネルは、フォークナーのすぐれた作品は、同級のものではないにしても、「神曲」あるいはソフォクレスの「エレクトラ」の全体的意味と同種のものであり、アメリカ文学では多くの点で似ているホーソンの作品に匹敵すると評価した。オドネルの神話論によってアメリカ批評界のフォークナー観は急激に変化を生じてきた。 Hoffman 教授はこれによって、(一)作品を継続的全体とみる手段が示唆され、(二)道徳的作家であることを強調し、(三)その作品人物を他の批評家の水準から高め、(四)南部の歴史にたいするその扱い方を明かにしたと述べている。

オドネルと同年にエイキン Conra Aiken は、フォークナーの文体と方法についてのヒックスの妄説を斥け、さらにベック Warren Beck は、^{ツァイレンス}フォークナーが南部作家として「人間奴隷化の罪」にたいする償いを意識した倫理的作家であり、暴力とフォークナーとの関連を展望する批評手段としてその「人間的見地」を重視する必要性を強調し、フォークナーの作家的立場は、彼の作品世界が単にニヒリズムに支配されているのではなく、その作品に登場する主人公がつねに敗北するにもかかわらず、その敗北は「価値の否定」の証明ではなく、悪の實在と、合理性の不確実および困難とを認めているのだとした。

オドネルの視点は更にすぐれた理解者マルカム・カウリーによって拡大、一般化された。フォークナーの作品(短篇および長篇の一部)は一九四六年当時全部の作品が絶版となっていたが、彼はフォークナーの作品世界が深南部ミシシッピ州に設定された神話の王国を舞台として、いわゆるヨクナパトファ系図小説 Yoknapatawpha Saga を形成するものとして集録した。この「ポータブル・フォークナー」のカウリーの序文はフォークナーを南部の風土とその歴史に固く結びつけ、フォークナーは自らの設定した神話の王国をバルザックの「人間喜劇」のように「植民者とその子孫」「ジェファースンの市民」、「貧乏白人」、「黒人」というような一連のシリーズに系図小説として構成していると規定した。それらは南部の歴史的説話ではなく、「緋文字」や「失樂園」のように神話と呼ぶべきもので、南部の伝統に生きてきた古い秩序の人々が南北戦争後新しくの上ってきた階級と倫理的に対立し、自らの伝統的掟と奴隷制によって植付けられた罪の良心の重荷のために敗北し、新しい階級は道徳に無力な北部の機械文明によって南部を破壊しているというサートリススノープス観を展開している。その作品世界の根底には南部の土地と人間とにたいするフォークナーの深い愛着と、自分の愛する南部が土着の奴隷の無知、北部から入りこんできた商人の強欲、地主の不在によって破壊されはしまいかという危惧が横たわって

いると理解した。最も誤解をうけた「サンクチュアリ」は単に性的な恐怖物語ではなく、ポパイは南部に侵入した機械文明を代表し、その暴力は裏返えされたフロイド的方法の一例で、性的悪夢は南部社会の象徴であると感じているが、オドネルのように彼をアレゴリストとはみないで、小説家というよりはむしろ、短篇に才を持つ「叙事詩人」または「吟唱詩人」であると呼んだ。カウリーの構想は一見してオドネル説を拡大したものであるが、そのすぐれた点は具体的にフォークナー世界の地政学的、歴史的背景を明らかにして作品の構成を理解したことである。彼はさらにフォークナーの文学における二つの伝統、ブラウンおよびポーにはじまる「心理的恐怖の伝統」と、南部特有のトール・テールに土台をもち、マーク・トウェンの伝統をつぐ「フロンティア・ユーモアとリアリズムの伝統」を指摘している。まったくフォークナーの文学は恐怖を頂点とする悲劇の要素と、生々としたユーモアの要素の二つを備えていて、彼のユーモアは最も悲劇的な渦中にも姿を現わしてくるものであり、彼の文学が悲劇的作品に始まり「盗人」The Reivers のユーモア作品で終わっているのも何らかの示唆を含んでいるだろう（彼のユーモアの思想的意味についてはオフアオレンの興味深い解釈がある）。カウリーはフォークナーの作品の新奇な構成にはむしろ疑問を投げけているが、ホフマン教授はフォークナーの叙述方法の重要性を十分に強調していないのは、オドネルおよびカウリーの欠点だとしている。

南部の重要な作家、批評家ウォレン Robert Penn Warren は、カウリーがオドネルのアレゴリーの厳密さと一種の教義的な傾きへ向う傾向を修正していることを認め、フォークナーのローカリティとの密接な関係を明らかにしたカウリーの視点を高く評価したが、しかし南部的要素からだけでなく、現代世界に共通な諸問題の点からフォークナーを眺めねばならない、つまり、現代の世界そのものが道徳的混乱に導かれているのだから、フォークナーの南部の神話はわれわれ人間全体の状態と問題との神話である、と主張している。ウォレンはフォーク

ナーが伝統的秩序の中に真理の概念を見出していることを指摘して、次のように述べている。「重要なことは人間の努力、生の機械的推移を越えようと努力する能力、忍耐には一種の自己征服があるが故に、耐え忍ぶ誇りである。しばしばいわれているようにフォークナーの作品が後ろ向きだといわれるとき、不易の倫理的中心は人間の努力と人間の忍耐とのあの栄光の中に見出されるというのがその答えである……。」ところでこのウォレンの言葉をその四年後に行われたフォークナーの受賞演説の言葉と比較したい。

「人間は耐え忍ぶばかりでなく、打ち勝つ (prevail) ものだ、と私は信じる。人間が不滅であるのは、創造物の中で人間だけが尽きることのない声を持っているからではなく、魂を、同情と犠牲と忍耐とが可能な精神を持っているからだ。このようなことを書くのが詩人、作家の任務である。人間の過去の栄光であった勇氣、名譽、希望、誇り、憐れみと同情、犠牲を想起させて元気づけることにより、人間が耐え忍ぶのを手助けすることがその義務である。」

これは全く酷似した思想内容だといわねばなるまい。ウォレンがフォークナーの作品に見出した南部の伝統的価値を、フォークナーが裏書きしたといつてよい。ウォレンの評価はフォークナーの作品の根底に積極的な倫理的価値を認め、長年のあいだ無道德、残虐崇拜、絶望的自然主義と評されてきた作品の評価を一変してしまつたといえる。ウォレンの論文に端的に示された、フォークナーの自然と人間の関係、黒人の役割、手法および象徴とイメージの問題は今日に至るまで多くの批評家の出発点となっている。スピラー教授 Robert E. Spiller は「アメリカ文学の周期」の中で、カウリーの序文によりフォークナーは一般に認められるようになり、ノーベル賞受賞は数年前であつたらんでもない見当ちがいと多くの者が思っただろうが、一九五〇年にはもうおそすぎた栄誉であつたと述べている。しかし、カウリーの統一的な発見も大きかったが、おそらくウォレンの高く深い

評価に側面的根拠を見出して授賞が行われたものと考えられはしないだろうか。ウォレンの導き出したフォークナーの「人間の努力」はフォークナーの用意周到な象徴にたいする多くの発見とともに、現在ではアメリカの批評家の非常に傾倒するテーマになっているように思われる。倫理、象徴、イメージ、宗教的倍音はビュリタニズムの伝統に立つアメリカの批評家によって特に好まれる概念である。これらの概念はすこぶる重要なものではないが、フォークナーの現代作家としての観点はこれらの概念が解明しようとする意図だけですべて明らかになるとは思われない。

三人のすぐれた批評家の理解によって、フォークナーはアメリカの正統な伝統の中に位置づけられ、さらにノーベル賞によってフォークナーは、一転してアメリカのすべての批評家が絶讃を惜しまず、そのあらゆる美点と創造的な意味とを見出しはじめた。それらの中でもヴィケリー Olga Vickery、チェース Richard Chase、コナー William Van O'Connor などの研究は注目すべきものである。ハウ Irving Howe の研究 (W. Faulkner: A Critical Study, 1952) はきわめて冷静にフォークナーの美点と欠点とを分析しているの、ほとんど無条件に賛美する批評家には気に入らないものであるらしい。ハウは「フォークナーの最も良い作品のあるものは、素材の抑制よりもむしろ素材への服従から生じている。社会概念はバルザックにおけるように彼を誘っていない……彼の作品には終始一貫した正確な社会的視点が全くない。彼の南部にたいする態度は、作品毎に変化し転調してしばしば彼の意志の抵抗に背いている。結局、彼は社会についての見解よりも人間についての見解をあたえているのだと評している (スチュアート教授は、作家の環境についての無知、あるいはその作家が愛している土地に対する敵意は批評家にとって重大なハンディキャップになる。とくに北部の左翼的な人々は社会改革の問題にまきこまれる傾向がある。ハウは一つの例である、と述べている)。

イギリスではオフォレインのフォークナー論 (The Vanishing Hero 1956) が興味深い。オフォレインは、フォークナーの象徴の不正確さ、文体にたいする疑問、自己矛盾の消極性など興味のある問題を新しく提出すると共に、カウリーがフォークナーの作品世界に、実際には存在しない一つの統一をあたえたと反論している。彼によると、フォークナーは古い南部の伝統の中にいる作家ではなく、サートリス系として描いているのは彼のロマン化である¹⁾。

アメリカにおける最近のフォークナー批評で、最も深い傾倒を示しているのは、スチュアート Randall Stewart²⁾、フォークナーはメルヴィルやシェイクスピアと同じに根元的な作家であり、「キリスト教の根本的概念をきわめて効果的に具体化し劇化しているので、彼は現代の最も深いキリスト教的作家の一人である」と見るのが正当であろう。彼の作品のいたるところに基本的な原罪の命題があり、いたるところに肉と霊との葛藤がある……フォークナーの人間は英雄的、悲劇的な人物である。ときおり彼は精神の偉大なものになる」(「アメリカ文学とキリスト教」刈田元司訳)と述べている。フォークナーの作品は殺伐血みどろなグラン・ギニョル座風の、読者にはよく理解のできない悪夢に憑れた世界だ、と「アメリカ文学史」に書いたカーンは、フォークナーが現代の最も深いキリスト教的作家だとは夢想すらすることができないだろう。

スチュアート教授のようにフォークナーを極端に高く評価するのはアメリカの批評界の一頂点を示しているものであるが、このような批評傾向は、たとえ多分の真実をふくんでいるとしても十分な説得力を持つているとは考えられない。「原罪の命題」という宗教的テーマから彼の作品を解釈すること自体が、批評の機能を局限するおそれがないとはいえない。なおまた、アメリカの批評には「下り行け、モーゼ」Go Down, Moses の「熊」The Bear にみられるフォークナーの肯定的な象徴から彼の全作品を俯瞰する傾向がみられるが、これはフォーク

クナー文学の分析の上に正当な方法といえるかどうか疑わしいように思える。むしろ、フォークナー批評の初期に多くの疑問を抱いた批評家たちが理解し得なかったフォークナーの問題意識に立戻って分析する必要があるだろう。

- (1) オファオレインに関しては別の機会に改めて述べる予定。